校　長　式　辞



厳しい寒さに耐えてきた校庭の杏の蕾も紅色の花を咲かせんと膨らみ始めようとしています。

本日ここに、金沢大学副学長山崎光悦様をはじめ多数のご来賓の方のご臨席のもと、第六十四回金沢大学学校教育学類附属高等学校卒業証書授与式を挙行できますことを、この上ない慶びと感じております。

第六十四回生一二三名の皆さん、金沢大学属高等学校ご卒業おめでとうございます。本学教職員・在校生とともに、これまで皆さんが尽くされた努力と研鑽とを心から讃えたいと思います。また、この日まで長きにわたってみなさんの勉学を支え励ましてこられた保護者の方々に対しても、ここに深く敬意を表したく存じます。

卒業生の皆さんは、この野田の学び舎で、本校のよき伝統のもとで、高い志と誇りをもち、思う存分青春を謳歌してきたことと思います。

授業では、教師と生徒の家族のような信頼関係のもとで、深い学問的知見に触れることを通して、学ぶことの厳しさと歓びを経験したことでしょう。特別合同授業等では、多様化・複雑化する現代社会において生きるための智慧を獲得し、未来への夢と展望をもつことができたでしょう。

また、課外活動や本校の伝統行事である開校記念祭・現地学習・運動会・歌の祭典などでは、自主自律の気風のもと、多くの人と考えを交流することを通して、生涯の知己、友人を得たことでしょう。皆さんが、附属高校在学中に出会い、そこでつくりあげた人間関係は揺るぎない絆であり、将来きっと、みなさんの人生を豊堯なものにするでしょう。

卒業にあたり、皆さんへのはなむけとして三つの言葉を贈りたいとおもいます。それらの言葉は、著名な数学者・教育者であるジョージ・ポーヤ博士が、科学者たるものがもつべき道徳的資質として述べた言葉で、「知的勇気」、「知的正直さ」、そして「賢明な自制」というものです。

「知的勇気」とは、多くの人々が正しいと思っていることを改めるには勇気がいるということです。私たちは、自らの信念でも潔く修正する覚悟がなければならないのです。皆さんもご存じのガリレオ・ガリレイは、同時代の人達の偏見とアリストテレスの権威に知的勇気をもって立ち向かった偉大な科学者でありました。

「知的正直さ」とは、経験によって明らかに反証されてしまった自分の考えに、ただそれが自分の考えであるという理由だけで、いつまでも執着するのは不正直だということです。信念を修正すべきもっともな理由がある場合には、それを修正するべきなのです。

そして、「賢明な自制」とは、真面目な検証もしないで、ただ流行を追ったり、考えを安易に変えたりすることを慎まなければならないということです。十分な理由もないのに、気まぐれに信念を修正すべきではないのです**。**

これらの資質は何でもないことのようにきこえますが、それらに実際恥じないように振舞うにはなみなみでない素質と努力を必要とするのです。

こうした資質は、科学者のみならず、すべての人にとってこれからの社会で生きていくために大切な資質だと考えます。皆さんがこれから活躍する社会は、「知識基盤社会」と呼ばれています。現在、世界的に、社会・経済が大きく変化しつつあります。機械等を用いて資源を加工して物を生産し、それにより経済的な利益を獲得することから、物に代わり知識を創造しそれを活用して利益を得ようとする社会へと、その構造が大きく転換しているのです。知識が社会・経済の発展を駆動する基本的な要素となる社会では、知識のグローバル化が一層進み、知識をめぐる競争と技術革新が絶え間なく生まれ、旧来のパラダイムが転換されていきます。

このような知識基盤社会では、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、より良く問題を解決する資質や能力が一層重要になってきます。そのためには、既成の知識を能率よく習得するだけではなく、習得した知識を活用するための、思考力・判断力・表現力等が重要になってきます。

附属高校での総合的な学習を中核とした探究的な調査学習、プレゼンテーションの競技会やディベート活動等は、知識基盤社会を逞しく生きるための高度な思考力・判断力・表現力等の基礎に培うものであったと確信しております。

卒業生の皆さんには、本校で培った高い能力を糧として、現代社会の様々な諸課題に、「勇気をもって」、「正直に」、そして「賢明に」対処していくとともに、様々な専門分野で自らの真骨頂を発揮し、我が国や世界をけん引するリーダーとして、まさに、聖徳の天使のように、あるいは中国の伝説にある四瑞の一つである「鳳」のように、輝きを放ちながら羽ばたいていただきたたいと思います。そして、わが国の未曾有の大震災からの復興や世界の経済・社会・環境・資源等の危機的状況からの克服に創造的に寄与する有為な人となれるよう願います。

皆さんは、今日、本校を巣立って行きます。しかし、皆さんが本校を出て行くことはあっても、皆さんの心から本校が出て行くことはありません。むしろ、本校の卒業生は、自分の母校をこよなく愛して下さり、同窓会を中心として生涯にわたって母校と豊かな関係を築かれておられます。

同窓会館である「有朋館」建設の際には、落成した会館をこの先訪れることがないと思われる全国各地の同窓生から母校愛に満ちた多くのご支援を賜りました。同窓生による特別授業では、各界の第一線でご活躍の方が貴重な時間を割いて在校生に現代の最先端の課題について紹介して下さいます。各地で開催される同窓会では、本校草創期の旧制金沢高等師範学校附属中学校卒業生から現役大学生までが集い、恩師と再会し、在校時の思い出を語り合い、同窓生の活躍を讃え、校歌を斉唱するのです。

幾世代を超えて同窓生が一つになれるのも、附属高校が、草創期から変わることなく「自主自律の精神」を尊重し、「師弟の間の信頼感」のもとで、「あたたかい友情と謙虚な気持ち」と「厳しくかつ清らかなる真理探究の態度」を育くんできた証であと考えます。

本校を卒業されても、皆さんには、日本海側唯一の国立大学法人附属高等学校として輝かしい歴史を有する母校の優れた伝統に誇りを持つとともに、互いに手をつなぎ、才を結び、叡智の時を磨きつつ、同窓生の絆を一層強くしていただきたいと願います。

金沢を愛し本校の校歌を作詞した室生犀星が詠んだ詩があります。

あんずよ花着け

地ぞ早やに輝やけ

あんずよ花着け

あんずよ燃えよ

皆さんも、ふるさとの校庭に美しく咲く杏の花を思いだし、いつの日か野田の学び舎を訪ねて下さい。

最後になりましたが、皆さんお一人お一人がこれからの長い生涯、幸運に恵まれ、悔いのない人生を送られることを祈りつつ、わたくしからの式辞とさせていただきます。

平成二十五年三月五日

金沢大学人間社会学域学校教育学類

附属高等学校　　校長　　大谷　実

在　校　生　祝　辞

　厚い雲の合間から時折のぞく鮮やかな青空と暖かな日の光に、確かな春の気配を感じます。卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。保護者の皆様にも在校生一同、心よりお祝い申し上げます。今日、卒業式を迎え、三年間の高校生活を終えようとしている皆さんは今、いったい何を感じ、どんなことに思いを巡らしているのだろうかと、卒業証書を手にされる先輩方の後ろ姿を見ながら、ずっと考えていました。それは、実際に自分がその日を迎えてみないと分からないものなのかも知れません。しかし、こうして壇上に立ち、皆さんの晴れやかな顔を見ると、すべてをやりきったという達成感と、燦然と輝く未来への希望が、はっきりと伝わってきます。来年、自分もそのような気持ちで卒業の日を迎えたいと思わずには居られません。

　思い返せば、私が先輩方と高校生活を送った二年間は、驚くほどあっという間でした。運動会やスポーツ大会、歌の祭典、開校記念祭など様々な行事の時はもちろん、日々の何気ない学校生活の中でも、独創的でパワフルな先輩方に圧倒され続けた二年間でした。附属高校の校風である｢自主・自律｣を見事に体現している皆さんの姿には、強い憧れと同時に、今の自分の力では到底追いつけない歴然とした差を感じていました。しかし、そんな私たち後輩を常にかわいがってくださり、私たちにとって最も近い存在に感じられたのもまた先輩方でした。私自身、サッカー部の活動の中では、先輩と非常に親密に関わることができ、感謝してもしきれないくらいお世話になりました。

　試合中、私がミスをしたときにかけてもらった先輩の一言に救われたこと。新人戦で能登に宿泊した時、露天風呂で一緒に話が盛り上がったこと。そして、引退した後であるにもかかわらず、記念祭の準備に全員が駆けつけてくれ、夜遅くまで懸命に作業を続ける先輩の背中がたまらなく頼もしく感じられたこと――。一つ一つのささやかな、しかし私にとっては限りなく大きな思い出は、今も全く色あせることはありません。そして先輩方は、このようなかけがえのない数々の宝物を、今、後ろに座っている我々在校生一人一人の心の中に、確実に残してくださいました。私たちは、先輩方から受け継いだものをしっかりと胸に刻み、附属高校の良き伝統を守って行くことをここに誓います。

　最後に、これから未来へ向かって羽ばたいて行く卒業生の皆さんへのメッセージとして、谷川俊太郎の詩の一節をここで紹介したいと思います。

　「人は限りないものを知ることはできない

だが人はそれを生きることができる

　　限りある日々の彼方をみつめて

　　未だ来ないものを人は待ちながら創っていく

誰もきみに未来を贈ることはできない

　　何故ならきみが未来だから」

　卒業生の皆さん、私たちは、先輩方がこの高校で培ってきた力を存分に発揮し、より良い世界を創るために邁進して行かれると確信しています。世界の、日本の、そして先輩方お一人お一人の「未来」を、先輩方の手で創り上げていってください。簡単ではありますが、先輩方のご健康とさらなる飛躍を心よりお祈りして、お祝いの言葉とさせていただきます。ご卒業おめでとうございます。

　　　平成二十五年三月五日

　　　　　金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高等学校

在校生総代　　西村悠作

卒　業　の　辞

　風もだんだんと暖かくなり、春の装いを増してきました。つい昨日のようではあるけれどももうはっきりとは思い出せない、あの入学式の日から三年が過ぎ、とうとう今日は卒業の日です。この三年間が長かったか短かったか、と問われれば短かったと答えるしかありません。しかし、私達はその三年間で非常に多くのことを経験してきたと思います。

　高校に入学した当初は、不安ばかりがありました。当時の私は附属高校の学習についていける自信もなく、人間関係も得意とは言えませんでした。また、附属高校が自由な校風だというのはつまり何もしてくれない学校なのだと思っていました。しかし、附属高校に入学して、部活動にも入り、自由な校風であることを誇りに思っていらっしゃる先生方や仲間達と出会い、自分も自由であることの楽しさと、その責任を感じるようになりました。そして、その自由が、決して何もしなくても得られるものではなく、先輩方が作り上げてきた伝統や先生方の努力の上に成り立っており、また自分達で築き上げて行かねばならないものだということも知りました。

　このようなことを知ったきっかけの一つに、本校の特色ある様々な行事があります。球技大会や歌の祭典、運動会の前にはクラス内から練習しようという声が挙がり、意見が割れたりしながらも、皆で同じ目標に向かい努力を重ねました。開校記念祭では一人一人が自分に割り当てられた仕事をこなし、夜遅くまで学校に残って準備をしたりして、忙しいながらも楽しい時間を過ごしました。黒部と台湾の現地学習では、黒部ダム建設のための先人たちの努力や、日本と台湾のつながりなどを知りました。

　普段の学校生活もかけがえのないものでした。入学してから三年間一日も休まず授業をうけたこと、昼食の時間に友人たちと笑い合ったこと、放課後に部活動に励んだこと、そんな毎日の普通な学校生活がとても楽しかったことを覚えています。しかし、これからはそんな生活が日常では無くなるのでしょう。あと一年でも二年でも、この学校で同じ仲間と過ごせたら…とは思いますが、そういう訳にもいきません。おそらく、この制服の袖に腕を通すのも今日が最後です。

　在校生の皆さん、先程は素晴らしい祝辞をありがとうございました。一年生の皆さんはこれから二年生に進級し、いろいろな生徒会行事を主体となって運営していかねばならなくなります。二年生は三年生となり、とうとう本腰を入れて受験勉強に励んでいく時期です。一年後、二年後には皆さんも高校の三年間を振り返ることになるでしょう。そのとき、これからの時間がとても大切なものであったと実感されるはずです。どうか、充実した日々を過ごして下さい。

　先生方、高校での学習は、量も難易度も中学校とは比べ物にならないほどでした。しかし、個性的な先生方の授業をうけていくなかで、私は初めて学ぶことの楽しさを知り、勉強に励むことできました。勉強以外でも、進路や学校生活、部活のことなど、先生方は様々な面で私達のことをサポートして下さいました。本当にありがとうございました。

　そして、お父さん、お母さん、ここまで私を育ててくれました。毎朝お弁当を作ってくれたこと、悩んだとき相談にのってくれたことは感謝してもしきれません。ありがとうございました。

　私達は、今日、附属高校を旅立ち、それぞれが自分の目指す道に向かって歩き出します。現在の世界には、様々な問題が山積しています。人の命はとても大切なものです。しかし、未だアフリカの南部には貧しく劣悪な衛生状況のもと、乳児死亡率が十パーセントを超え、平均寿命が三十歳台の国があります。また、中東などでは長らく紛争が収まらず、沢山の人命が失われ続けています。世界中でこのような悲しいニュースが後を絶ちません。いまからちょうど二年前には日本でも東日本大震災が発生し、大津波も起こって二万人近くの人が犠牲となり尊い命を失いました。このような悲惨な大事件でも時が経つにつれ記憶から薄れてきた感があります。私はあの事故の記憶を決して風化させてはならないと思います。日本中で被害にあわれた東北の人たちをこれからも支え続けていかなければならないと思います。

　私たちの前途には、このように解決に向けて取り組まなければならない問題が数多くあるでしょう。近い将来、私たちそれぞれが各自で身につけた専門知識や技能を生かし、そういった問題に関わっていくことになるはずです。それは、決して簡単なことではないでしょう。

　しかし、そんな時こそこの金沢大学附属高等学校で学んだ三年間の経験が活かされてくると思います。国家・社会に貢献する高い志を持つこと、いつでも仲間を大切にして助け合い、互いに成長していくことの大切さを学んだ高校時代がきっとこれからの人生の糧となっていくと確信しています。

　最後になりましたが、今後の金沢大学附属高等学校のさらなるご発展を祈りつつ、卒業の辞とさせていただきます。

　平成二十五年　三月五日

　　　　　　金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高等学校

　　　　　　　　　　　　　　　　　　第六十四回生総代　　川　上　愛　絵